



Iris

発行日
令和5年6月27日

新潟市立鳥屋野小学校

あいらす



文責 校長 佐藤貴子

謝ることと許すこと ～学校はどう指導するのか～

先日、将棋の藤井総太さんが名人戦を制して7冠となりました。第3局では渡辺明名人に敗れましたが、いつもながら「負けました」と自ら宣言し、深々と頭を下げる藤井総太さんの姿には、心が奪われます。

藤井さんは、もともと筋金入りの負けず嫌いで、幼少期は負けると大泣きして悔しかったというエピソード動画を微笑ましく見たことがあります。ですが、将棋の強い「藤井くん」は、技とともに人間性を磨き、プロ棋士になり「藤井さん」になり、公式の場では段位をつけて呼ばれ、今では「藤井七冠」です。「負けた時は潔く、勝ったときは相手への敬意を表し、より深く頭を下げる」と言い、勝ったときも写真だけ見れば、「えっ、藤井さん負けたの」と思ってしまうほど低く将棋盤すれすれに頭を下げます。

七冠と言う偉業を成し遂げても、今でも「藤井くん」の時と同じに、礼を尽くして感謝の心を忘れないところに、一流人の謙虚さを学びます。



さて、被害者意識が強く、人の過ちを許すことができなくなっている人が多くなったと言われています。

子どもたちの中にも、相手が謝っても「絶対許さない」「悪いのはそっちだ。」と頑なになったり、「死ね」などの心に突き刺さる強い言葉を言う子がいます。

一方で、世間では常識の「悪いことをしたら謝る」が、できない子どももいます。自分を防衛しないと危険にさらされると思い、人のせいにする子どももいます。謝ることは負けだと感じて、口をつぐむ子もいます。

こんなとき、学校はどのように子どもを育てているかというと、私たちは、謝罪を強要しません。「謝りなさい」「こめんなさいは？」と促して、その場だけの機械的に謝らせることはしません。握手したら仲直りという単純なことではないのです。本当は納得したわけじゃない

のに、謝らされたとなると子どもの心の中に負の感情が残り燻ります。だからまた再燃することがあります。

私たちは、まず事実の確認をしっかり行います。何があったのか一人一人から聞き取り、振り返らせます。なぜそうしてしまったか、今その時に戻れたらどうしたいか、何が納得できないのかなど、子どもの気持ちに寄り添って聴きます。そのうえで、こんなふうにしたらどうかと提案したり、一緒に謝ろうかと背中を押すこともあります。

スピード解決、その日のうちに一定の解決を目指していますが、繊細な感情を伴う対応には時間がかかることもあります。その結果として、子どもの口から「謝る」と自分の非や過ちを認めて謝ることができる子どもを育てていきたい。それが私たちの考えです。

デニス・R・リトル

世の中には鮮やかな色がたくさんある。何にでも白黒つけるなんて恥ずかしいことだ。

池波正太郎

近頃の日本は何事にも「白」でなければ「黒」である。その中間の色合いが全くなくなってしまった。その色合いこそが「融通」というものである。

世の中は、白と黒ではありません。まして人の感情や行動は0か100かではありません。だから、その間の曖昧な部分に向き合うことができるのと楽になり、自分中心から相手の気持ちを想像したり、思いやったり、感謝につながると思います。

地域の人々・地域の環境とかかわる「とやのデザイン」 の学習を進めています

6月7日（水）にチビユニティの皆さんが来校し、ダンスパフォーマンスを披露してくださいました。新潟日報（6月25日版）にも掲載されたので、ご存じの方もいらっしゃると思います。子どもたちは「音楽やダンスに合わせた表情がすごい」「動きが大きくてかっこいい」「感動した」などと感想を發表していました。

世界的に活躍するダンスユニットであるチビユニティさんが、大島に練習拠点を置いていらっしゃるご縁で、何とか鳥屋野小の子どもたちに華麗な技をみせていただけないかとお願いしたところ、快くお引き受けいただきました。

今後、6年生はキャリア教育としても、メンバーの方からお話をお聞きしたり、体育のダンスの単元でゲストティーチャーとしておいでいただく予定です。

